

助詞の名詞（放り出された名詞）」と「係助詞を伴った名詞」は本質的に異なるのかどうか。これらの点については、今後の課題ということになる。

注

- (1) 金水敏氏「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐって』平5、くろしお出版
- (2) テキストには新日本古典文学大系（平5）、岩波書店、第五冊未刊）を使用し、第二冊まで（蜚巻まで）を直接の調査対象とした。また、和歌は対象外とした。引用にあたっては、歴史的仮名遣いに統一し、表記を一部改めた。未刊（第五冊）の早蕨巻以降の引用は、源氏物語大成を用い、表記を改めて引用した。
- (3) 「を」は、省略されることが多く、（中略）その他の格助詞は省略されることはまずないと考えてよいでしょう」（佐伯梅友氏『古文読解のための文法 上』昭63、三省堂、九二頁）など。
- (4) 他に「人の心こそうたであるもの（に）はあれ」（葵）といった助動詞の類4例と、二格が係助詞「は」で取り立てられたもの5例があげられている。また連体の助詞「が」の省略例が2例あげられている。
- (5) 「昨日、山へまかりのぼりにけり。」（夕顔・①一二七）、「いと暑きころ、涼しき方にてながめ給ふに」（幻・④二〇一）など。
- (6) 「まいて、君達の御ため、はかばかしくしたたかなる御後見は、何にかせさせ給はん。」（帚木・①五七）など。
- (7) 「いみじき武士、あたたかきなりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば」（桐壺・①一九）など。
- (8) 「源氏詞」「若き人々、渡殿の戸あけてもの見よや。…」とのたまへば」（蜚・②四三四）など。
- (9) 以下、本稿では主格成分以外の補充成分を「補語」と呼ぶ。
- (10) 「光源氏」と、その名だけは仰山にもてはやされており（新

全集訳

- (11) 「これはやはりあの頭中將の常夏の女ではあるまいかと疑われて」（新全集訳）
- (12) 「東宮のご縁からも宮がお気の毒に存ぜられまして」（新全集訳）
- (13) 今泉忠義氏訳、佐藤定義氏訳、新全集、中井和子氏（京こ）訳など。
- (14) 29のような解釈は、玉上評釈、新潮集成など。
- (15) 乙二型では次のような例がみられる。「催馬楽ノ」あなたたふと遊びて、次に「催馬楽ノ」桜人、月朧にさし出でてをかしきほどに、中島のわたりに、ここかしこ篝火どもともして、大御遊びはやみぬ。」（少女・②三一九）
- (16) 「全体主格」と考えれば（北原保雄氏『日本語の文法へ日本語の世界6』昭56・中央公論社・二四七頁以下、同氏『日本語文法の焦点』昭59・教育出版・八三頁以下）第一節VIの規定によって挙例の対象外となるが、無助詞の名詞の用法の確認のためあえて触れたものである。
- (17) 無助詞の名詞句は、係助詞「は」によって取り立てられた名詞句と本質的に異なるものである可能性がある（北原保雄氏『行ふ尼なりけり』考―その文構造と意味―（昭61）『表現文法の方法』平8・大修館所収、金水敏氏注1文献、金水敏氏「語りのハ」に関する覚書『日本語の主題と取り立て』平5・くろしお出版所収）。しかし、今のところ詳細は明らかではない。

- 38 朱雀院の行幸、けふなむ、楽人、舞人定めらるべきよし、よべうけたまはりしを、おとどにも伝へ申さむとてまかで侍る。(末摘花・①二二九)
- 39 なほざりにても「源氏ガ」ほのかに見たてまつり通ひ給ひし所々、人知れぬ心をくだき給ふ人多かりける。(須磨・②五)
- 所謂「総主」も存在する。<sup>16)</sup>
- 40 みかど御心動きて、(賢木・①三五〇)  
次例は「読む」の目的語「その宣命」の提示と考えられる例である。
- 41 三位のくらゐ送り給ふよし、勅使来てその宣命読むなんかなしき事なりける。(桐壺・①九)
- 提示には、次例42のような、驚きの気持ちをもって提示する例がみられる。ちょうど現代語の43の傍線部に相当するものである。
- 42 聞こしめす御心まどひ、何事もおぼしめし分れず、籠りおはします。(桐壺・①八)
- 43 その瞬間の母親のようすといったら、まったく、きみに見せてあげたいものでした。(アンデルセン「絵のない絵本」矢崎源九郎訳へCD-ROM版「新潮文庫の百冊」〈 〉)
- 類例をあげる。
- 44 瘦せたまへる事、いとほしげにさらばひて、肩のほどなどは、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。(末摘花・①二二四)

- 45 …、浪風にさわがれて「逃ゲタ」など、人の言ひ伝へん事、後の世までいとかるがるしき名や流しはてん、と「源氏ハ」おほし乱る。(明石・②五二)
- 46 のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれるも、住み馴れ給ひし故郷の池水思ひまがへられ給ふに、言はむ方なく恋しきこと、いづ方となく行く方なき心地し給ひて(明石・②六四)

## 五 結論と今後の課題

以上、源氏物語を資料として、無助詞の名詞は、従来考えられている以上に、相当多様な成分として文中に現れていることを示した。無助詞の名詞として現れ得る成分を整理して示すと、次のようである。

- 一 主格、ヲ格
- 二 二格
- 三 種々の格
- 四 接続句的に解釈されるもの
- 五 格関係を有さない提題

これだけ多様であつてみれば、無助詞の名詞は、特定の格に係わらず、構文的職能を明示しない表現として、単に、文中に放り出されたものと考えることができらるだろう。

しかし、そのような「名詞の放り出し」という現象を認めるとして、主格、ヲ格のもの(一)までもそれに含めてよいのだろうか。一と二(五)または一と三(五)は本質的に異なるのだろうか。また、特に五について、「無

右の傍線部は下の述語に対して如何なる格関係もたない。「藤壺は同じ後の宮と申し上げる中でも、先帝の後腹の御子であつて」のような資格（意味的關係）で下文に続いている。このように、下文に対し格関係をもたない無助詞の名詞が存在する。右の例は繫辞（コピュラ）の非表出ということができよう。類例をあげる。

31 海のつら（＝入道ノ邸）はいかめしうおもしろく、これ（＝明石上ノ住ム岡辺ノ宿）は心ほそく住みたるさま、ここにゐて思ひ残すことはあらじとおぼしやらるるに、物哀なり。（明石・②七六）

32 「上ノ品ハ、家柄ヤ信望ニ」うちあひてすぐれたらむもことわり、これこそはさるべきこととおほえて、めづらかなる事と心もおどろくまじ。（帚木・①三七）

33 宮（＝女五宮）、「源氏ニ」対面したまひて、御もの語り聞こえ給ふ。「宮ハ」と古めきたる御けはひ、しはぶさがちにおはす。（朝顔・②二五二）

次例は、「ゝであるが」といった前置きの接続句的に解される例である。

34 「源氏ノ心中」明石上ガ」世の中をあぢきなくうしと思ひ知るけしき、などかさしも思ふべき、心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじと思へるを、おほけなし、とはおほすものから（薄雲・②二四五）

なお、乙一型の名詞には、繫辞の他にも述語の非表出と考えられる例が存する。次例35のようなもので、傍線部の下には、現代語で言えば「ゝがあつて」（具体的にいえば

「ゝを形見として」または「ゝをお贈りになり」など）といった述語が補われよう。

35 「形見にしのび給へ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべき事はかたみにえしたまはず。（須磨・②四三）

次例の傍線部は「日ごろの」という連体修飾語や接頭語「御」を伴っているから名詞であるが、これを受ける述語がなく、従つて下文に対し格関係をもたない。これは「日ごろの御ことを物語り、」といった句（英文法的にいえば節）が名詞句に凝縮したものと考えられる。

36 「光源氏ガ紫上ニ」日ごろの御物語り、御琴など教へ暮らして出で給ふを、「紫上ハ」例のと、くちをしうおほせど、いまはいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。（花宴・①二八〇）

以上、無助詞の名詞には、下文に対し格関係を有さず、接続句的に解釈される例が存在することをみた。

#### 四 提題と解釈されるもの

37 御方々の人々（＝源氏方ト葵上方トノ女房ハ）、世の中におしなべたらぬを「左大臣ハ」選りとのへすぐりてさぶらはせ給ふ。（桐壺・①二七）

右例の述語「選りとのへすぐりてさぶらはせ給ふ」の主語は「左大臣」、目的語は「世の中におしなべたらぬ〔者〕」である。傍線部は、下の述語に対して格関係を有さず、主題を表すと考えられる。類例をあげる。

ど(「源氏」)のかくだだ人にて世に仕へ給ふも、あはれにかたじけなかりける事、かたがたおぼし悩みて、日たくるまで出でさせ給はねば、…(薄雲・②二三五)

右20、21は心中の引用が直接地の文に融合したものの。他に次のような例があり、22は「と」<sup>⑩</sup>、23は「か」と<sup>⑪</sup>が傍線部の下に補われるかと思われる。

22 光源氏名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに(帚木・①三三二)

23 なほかの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざままづ思ひ出でられ給へど、(夕顔・①一一五)

次例は「因由格」とでもいうべき成分と考えられる例である。

24 「源氏詞」「…。院ののたまはせおく事はべりしかば、又「藤壺ノ」後見仕うまつる人も「私ノ他ニ」侍らざめるに、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。(賢木・①三七二)

これは、源氏が藤壺接近をなんとか合理化しようとして、帝に「私の他に藤壺中宮をお世話申し上げる人もないようでございますので、東宮のご縁からも、気がかりに存じないではいられないのでございまして」と申し上げているのである。次例も同様の例である。

25 上(「紫上」)の御方には、「夕霧ヲ」御簾の前にだに、もの近うもてなし給はず、「源氏ハ」わが御心ならひ、いかにおぼすにかありけむ、うとうとしけれ

ば、「紫上ノ」御達なども「夕霧ニ」けどほきを、けふはものの紛れに入り立ち給へるなめり。(少女・②三三〇)

以上、主格、ヲ格、ニ格以外の格成分が無助詞で文中に現れ得ることを示した。但し無助詞の名詞は、もともと格助詞によって格関係を明示されていないために、その下文に対する関係は、時に、かなり曖昧となる。例えば、26のような例である。26は、27に照らして、格助詞「より」の非表出かと思われ、実際そう解する注釈書も多いが、一方、24、25に照らして、28のようにも、また、最も穏やかには29のようにも解釈されよう。

26 八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋残りなく漏り来て、(夕顔・①一一五)

27 火ともしたる透影、障子の上より漏りたるに、(帚木・①六三)

28 八月十五夜、隈なき月影「ガ」、隙多かる板屋「ユエニ」残りなく漏り来て

29 八月十五夜、隈なき月影「ガ」、隙多かる板屋「ニハ」残りなく漏り来て

### 三 接続句的に解釈されるもの

30 「藤壺ハ」同じ宮と聞こゆる中にも、后腹の御子、玉光りかかやきて、たくひなき御おぼえにさへものし給へば、人もいとことに思ひかしづききこえたり。

(紅葉賀・①二六七)

勝 9は時、10は動作状態の依拠を表す、それぞれ二格と考えられる。

田 11 辰巳の方の廂に「源氏ヲ」据ゑたてまつりて（若菜上・③二五二）

12 「薫ハ大君ヲ」寢覚め寢覚めに物忘れせず哀にのみおぼえ給ひければ（東屋・源氏大成本・一八四〇）

13 一品の宮の御物怪に悩ませ給ひける、∴（手習・源氏大成本・二〇二六）

このように、二格の非表出の例は存在するのであるが、主格やヲ格の非表出の例が非常に多い（むしろそれが常態であるとさえいえる）のに比べ、二格の非表出の例はかなり限られているといえる。なお例をあげる。

14 「∴。何事につけても、おほやけの御方に「源氏ガ」うしろやすからず見ゆるは、春宮の御世、心寄せことなる人なればことわりになむあめる」と「弘徽殿女御ハ」すくすくしうの給ひ続けるに、（賢木・①三九〇）

15 「源氏ノ」おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。（須磨・②二三）

16 「源氏ハ」このごろの御やつれにまうけたまへる狩の御装束着かへなどして出で給ふ。（夕顔・①一三三）  
16は、現代語の感覚では「狩の御装束に着替え」であろう。ただし源氏物語中の「着かふ」は全て補語に「無助詞の名詞」を取り、助詞の表出された例を得ない。このように、用言の中には、補語に無助詞の名詞を取ることが常態とす

るものが存在すると言い得べきであると思われる。

二・二 種々の格成分と考えられるもの

主格、ヲ格、二格以外の格成分が無助詞で文中に現れることがある、と思われる。

17 御門守り、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、とみにもえあけやらず。（Ⅱ7）

18 「源氏ハ」山がつめきて、聴し色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらにゐなかびもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれてきよらなり。（須磨・②四二）

右の傍線部は「ゝの姿で」といった意味で下文に続いている。傍線部の下には次例にみられるような、格助詞「にて」が補われるかと思われる。

19 几帳の際すこし入りたる程に、桂姿にて立ち給へる人あり。（若菜上・③二九六）

引用の格助詞「と」の非表出の例をあげる。

20 「六条御息所ノ心中」光源氏ガ」やむごとなき方（Ⅱ葵上）に、いとど心ざし添ひ給ふべきことも出

で来にたれば、ひとつ方に（Ⅱ葵上一人二）おぼししづまり給ひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべき事、中々もの思ひのおどろかさるる心地し給ふに、御文ばかりぞ暮れつ方ある。（葵・①三〇二）

21 「帝ノ心中」故院の御ためもうしろめたく、おと

と考えられている<sup>3)</sup>。実際、北山谿太氏「源氏物語の語法」(昭26、刀江書院)の「助詞の省略」(四三―四六頁)をみても、「ため(に)」「ゆゑ(に)」の場合の「に」の省略などを除き、「を」助詞の省略例しかあげられていない。このように文中の格助詞を伴わない名詞は―時や数量を表す名詞を除けば―主格かヲ格の格成分として解釈されるのである。

では、次のような例はどう考えるべきであろうか。

7 御門守り、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、と  
みにもえあけやらす。(朝顔・②二六一)

この傍線を付した名詞は、述語に対し主格とも、ヲ格とも(また二格とも)解釈されない。本稿は、源氏物語を資料として、助詞を一切伴わない名詞(乙二型の名詞)の下文に対する関係は、主格、ヲ格にとどまらず、相当多様であることを示すものである。

## 一 対象の定義

前節乙一と乙二とは格助詞を伴わない点で同一視できようが、本稿では、考察の対象を前節乙二のタイプ、すなわち助詞を一切伴わない名詞に限定する。以下、I、Vの要件を満たす名詞を「無助詞の名詞」と呼ぶ。

- I 助詞を一切伴わない文中の名詞であること
- II 時、方向、数を表す名詞ではないこと
- III 「ゆゑ」「ため」など接続助詞的に働く形式名詞ではないこと

IV 並列の関係にある項の一つではないこと

V 呼格(呼びかけ)<sup>8)</sup>ではないこと

さて、前節用例5、6のように、無助詞の名詞が主格またはヲ格として働くのは通常のことなので、以下の考察は、前節7のような「主格またはヲ格として解釈されない無助詞の名詞」に向けられることになる。すなわち、

VI 述語に対して主格またはヲ格の成分として解釈されないこと

以下、右のI、VIの要件を満たす無助詞の名詞の、下文との関係を整理する。下文との関係には種々のものが観察され、相当に多様である。大きく三類に分けて示す。

## 二 格成分と考えられるもの

二・一 二格成分と考えられるもの

8 おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。(桐壺・①二四)

9 女(二六条御息所)は、いとものをあまりなるまでおぼししめたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝覚め寝覚め、おぼししをるることいとさまさまなり。(夕顔・①一〇九)

10 こぞより、后(二弘徽殿)も御物のけ悩み給ひ、…(明石・②八〇)

右の傍線部は、それぞれ11、12、13に照らして、8は場所、

源氏物語における無助詞の名詞

小 田 勝

Noun Phrases without a Particle in

The Tale of Genji

Masaru Oda

Abstract

In the Japanese language, a noun is usually followed by a particle in a sentence. And the particle marks the case. As for the classical Japanese, it is known that a noun is often used without having a particle when the noun is interpreted as either the nominative or the accusative. (I call this type of noun "the noun phrase without a particle" in this paper.) In *The Tale of Genji*, however, noun phrases without a particle are found which are interpreted as neither the nominative nor the accusative.

This paper deals with the various usages of the noun phrases without a particle found in *The Tale of Genji* and shows that they are classified into the following three types:

- i. the ones which are taken as the nominative, the accusative, the dative, and other cases,
- ii. the ones which can function as the conjunctive, and

iii. the ones indicating the theme of the sentence.

○ 本稿の目的

名詞が文中に現れる形式には、次のタイプのものがある。

甲 格助詞を伴うもの

- 1 いみじう忍びてこの御子を鴻臚館に遣はしたり。  
(桐壺・第①冊・二〇頁)

- 2 「……」と内侍の典侍の奏し給ひしを(桐壺・①二

一)

乙 格助詞を伴わないもの

- 乙一 格助詞以外の助詞を伴うもの

- 3 世になくきよらなる主のをのこ御子さへ生まれ給ひぬ。(桐壺・①五)

- 4 御子はかくてもいと御覽ぜまほしけれど(桐壺・①九)

乙二

- 助詞を一切伴わないもの

- 5 若宮まあり給ひぬ。(桐壺・①一八)

- 6 「勅使ガ」その宣命読むなかなかしき事なりける。(桐壺・①九)

乙の名詞は格助詞を伴っていないが、述語との結びつきから、3、5は主格、4、6は目的格(以下ヲ格という)であると解釈される。このように、名詞は格助詞を伴わずに格関係を表すことができるのであるが、乙のように格助詞を伴わない名詞が表し得る格は、ふつう主格かヲ格に限る